生命の誕生と生きるということ

——Sylvia Plath の *Three Women* について——

岡　村　眞　紀　子

はじめに

Sylvia Plath を考えるとき，どうしても「何故，Sylvia は死んだのか？」という問から出発せざるを得ない。それほどに彼女の死は，彼女にとって重い。彼女の作品を読めば当然の帰結とも考えられる彼女の死に対し，私が「何故？」と問い続けるのは，それが Sylvia が2人目の子供 Nicholas を産んで1年後のことだからだ。1960年，長女 Frieda を出産の後，翌1961年に流産を経験，さらに翌年に長男の出産と，生命を育み続けた Sylvia は，はじめての出産以降，めざめたようにすぐれた作品を書いていた。彼女にとって「生」は何より大きな意味をもっていた筈だ。彼女の死は，この大きな意味をもつ一つの線上に並ぶものであるに違いない。「何故，Sylvia は死んだのか？」という問は，とりもなおさず彼女自身が問い続けた「生とは何か？」「人間存在とは何か？」という永遠の問に重なってゆくと思われてならない。

I　最初のモノローグ

前述したように Sylvia は1960年から1962年の3年間に2回の出産と1回の流産を経験しているが，その直後に，ただ1つのラジオ放送むけの作品 *Three Women* を完成している。無事男の子を出産した主婦，流産したオフィスガール，女の子を出産しながら里子に出してしまう女子学生と，それぞれ違った形で生命と関わった3人の女性のモノローグで綴られた韻文劇は，彼女自身の体験を通して彼女の中につちかわれてきた「生」への想いから生まれてきたものといえるだろう。

Three Women は入院直後の3人のモノローグで始まる。First Voice なる主婦は 'I am ready.' (l.14), Second Voice なるオフィスガールは 'I am found wanting.' (l.35), Third Voice なる女子学生は 'I wasn't ready.'(l.57,59)と，それぞれ自己認識している。'ready' とはどういうことであり，'wanting' とは何が欠けているのであろうか。生命が誕生すること，生命を誕生させることはどういうことなのかを考える鍵が，この2つのことばに秘められているようである。

全体を通じて最も饒舌な Second Voice は最初から一番ことば数が多いが，28行にわたるモノ

ローグ中に，‘flat’に類する語が4回，death に類する語が8回もでてくる。この2つが Second Voice の心の底に流れる意識の根幹といえよう。最初出血したとき，flatness を感じるのは囲りの男性に対してであり，‘something…like cardboard’(l.17)というように莫然としている。

…and now I had caught it,
That falt, flat, flatness from which ideas, destructions,
Bulldozers, guillotines, white chambers of shrieks proceed,
Endlessly proceed—and the cold angels, the abstractions. (ll. 17 - 20)

彼女が生きている社会は男性社会。‘the man I work for’(l.22) ということばに表われるように男性が中心に動く会社の中でのオフィスガールは，たくさんの部品からなるひとつの機械の1つの部品，歯車にすぎない（l.29）。オフィス生活から出てくるのは，単なる文字（letter）であってことば（word）ではない（l.27）。タイプのキーに象徴される‘black’の世界（l.27），その‘black’の世界の中で彼女は‘white’（l. 22）。生命の躍動のない‘black’と生命を生み出さない不毛の‘white’。彼女の住む世界も死。彼女自身も死。

I saw death in the bare trees, a deprivation. (l. 23)

I am dying as I sit. (l. 30)

2度目のモノローグの中でも‘It is a world of snow’(l.64)，3度目のモノローグでも自分の住んでいる地球について，‘Old winter-face’（l. 158）といい，続いて4度目のモノローグでも‘How winter fills my soul!’（l. 177）といっているように Second Voice の世界は冬。冬は死の季節で木々にも緑の葉はみられない。死の世界の只中で彼女自身，頻死の状態——どんどん脈搏も希薄になりながら(ll. 38 - 9)，目にするのは死。出血してしまった今，育んできた生命は‘the cold angel’(l. 20, 39)でしかない。生命を育んできたはずなのに，それが今や‘死’だとすれば，自分はずっと長い間，死を愛し続けてきたことになる。死を育ててきたなんて，死を愛し続け，生み出してきたなんて，罪なのだ。

Is this the one sin then, this old dead love of death? (l. 42)

流産したことは自分の罪，と自己嫌悪にとらわれる彼女は，ただそれだけにとどまらない。先にもみたようにこの死は‘deprivation’でもあり，この‘bare-trees’の社会——不毛の社会の中で奪いとられていったものなのだ。自分の呼吸しているのは破壊の粒子であって清浄な空気ではない。だからどんどん息詰ってゆく，と考える（l.23,38）。生きているのが死の世界なのだだから，そこに生

命の育つわけがない。世界は今や何の未来への希望もない，'white'におおわれたものとなり(l.34)，それは'flat'な男性たちによって作り出されてきた世界なのだ。全てが抽象にすぎず，人間らしい愛はない。人間らしい生命，心の躍動がない——ブルドーザーやギロチンで作りあげられてきた社会は，ついには第二次世界大戦という大きな罪に突入し，ナチスのユダヤ人虐殺という狂気まで生み出した。'white chambers of shrieks' (l. 19)にはナチスのガス室への想いが感じられるが，Sylaiv にはアメリカ人としての，また父親から受け継ぐドイツ人としての戦争での罪の意識が深い。この詩の中でも，ただ1つの生命を育みきれず流産してしまったことへの自己嫌悪にとどまらず，もっと多くの大きな死を生み出してきたことへの自己嫌悪へとのめりこんでゆく。'I am found wanting.' (l. 35) の自己認識も，ただ女として不完全だというのではなく人間としての不完全さにまで及ぶのである。オフィスの中を歩きまわるこの自分の足は義足 (l.35)。それもおそらく足だけにとどまらないであろう。ひょっとしたら心も…。

この暗い Scond Voice のモノローグをはさんで First Voice と Third Voice のモノローグがなされるが，2人は共に出産を控えている。お腹の中には生命が育っている。この2つのモノローグには，どちらにも鳥のイメージがうたわれる。1つはきじ(pheasant)で，1つは白鳥 (swan) だ。何事もなく平凡に出産を迎える主婦が産院のベッドで想い描くのは丘の上で羽根を整えているきじの姿。

The pheasant stands on the hill;
He is arranging his brown feathers. (ll. 11 - 12)

きじの羽根の色，'brown' は First Voice にのみ出てくる色だが，今や熟しきってはじけようとする種子のイメージとしてもでてくる (ll. 99 - 100)。そこでは，'the browness is my dead self' (l. 100)とはっきり述べられている。茶色い殻がはじけて種子がとび出し，新しい生命として成長していき，殻は古い生命として死んでゆく。母親は子供に生命を接ぎ木して出産の時点で死に，子供の中に生き続けてゆくものだ，と Sylvia は考えているようだ。[(1)] 自己の死によって生命をつないでゆくというのは，キリストの愛にも通じるものだが，出産を 'miracle' (l. 127) と考え，子供の誕生を 'visitations' (l. 130)，'manifestations' (l. 131)ととらえる First Voice が，出産を目の前にして準備しているきじを丘の上に立たせているのは，やはりゴルゴタの丘への想いがあるといえるだろう。このときの彼女はすっかり落ちついていて微笑み (l.13)，辛抱強い (l. 1) 。天体の営みからはずれて自分の時を生きている。自分を自覚し，自分の世界に生きているかのようだ。'I am ready' と，身も心も準備できているのだ。

一方 Third Voice のモノローグには白鳥があらわれるが，いうまでもなく真白だ。

I remember a white, cold wing

And the great swan, with its rerrible look,
Coming at me, like a castle, from the top of the river. (ll. 49 - 51)

胎内に宿した子供を象徴する白鳥は，彼女のところにとどまらず通りすぎていってしまう（l. 53）。これから産もうとしている子供が彼女の腕の中にとどまることなく，里子に出さなくてはならないからである。かわいい幼な子の顔ではなく恐ろしい顔をして，眼には 'black meaning' をたたえている（l. 54）。悪意であると同時に死——それも罪によって生み出された死を意味しているのだ。Third Voice にとって子供を身籠もり，出産しながら育てられず手放すという出来事は重く，彼女の世界をまるごと変えてしまう。

I saw the world in it—small, mean and black,
A hot blue day had budded into something. (ll. 4 - 56)

子供を身籠もったと知ったとき，'The willow were chilling'(l.44)だったという。生命の源泉たる海の色 blue[(2)] の日はその色を失ない温度をも失なって，生命の色，green の柳は寒さに震えた。Third Voice の6度にわたるモノローグで，これ以降，green や blue が表われることはなく，Second Voice と同じく white, black, red の3色のみの世界になる。そのとき，彼女は自己を喪失したのだ。自己は囲りの世界と同じく自分のものではなく，自分を脅かすものとなってしまう。愛に満ちたはずの従順な鳩（doves）も，Sylvia が何よりよりかかっていたことば（words）すらもそうだ。星（stars）も太陽の光（showers of gold）も。何もかもが「妊娠」という事実と同様，ただの概念にすぎなくなり，生命につながらない。'conceptions, conceptions!'（l. 48)の叫びは「妊娠」に怯えると同時に，自分をも含む世界の生命のなさに向かっての絶叫である。自分を襲うように向かってくる白鳥の中に，彼女は蛇(snake)をみるが，それは罪の象徴。Third Voice も Second Voice と違った意味で罪の意識を感じている。Second Voice はこの世——時間，空間の四次元の世界の中で生きられなくなっているが（l. 30），Third Voice は自分自身を喪失してしまっている。

The white clouds rearing
Aside were dragging me in four directions. (ll. 57 - 58)

I wasn't ready' と2度もいう（l. 57,59）Third Voice の声を無視して死の色をした雲が，彼女を思いのままにひきずる。ひきずられる彼女は何が何だかわけもわからない。子供を孕み，育て，出産するということが，まだ何1つわからず，身体も心もまだ準備できていないのに妊娠してしまった彼女には，出産は最初から死の影を帯びているのである。何も認識していなかったということは，子供ができてしまっても何とかなると思っていたという続く2行に明きらかだ（ll. 60 - 61)。母親

が 'ready' の状態であろうとなかろうと，同じように胎内の子供は育っていく。しかも同じように 'with love' (l. 63) というのが悲しい。受精した１個の細胞は既に１つの生命であり，１つの精神であるが，それが完全なものへと成長し，１個の人間となることはむずかしい。

Is it so difficult
For the spirit to conceive a face, a mouth? (ll. 25-26)

「そんなに」むずかしいのかと Second Voice が問いかけるように，自然で，あたりまえのことのようにみえながら，そうではない。ところが一方，望むことなく，むしろ否定したいと思っている Third Voice の胎内では，いともたやすく，すくすくと成長していく。生命は人間の意志からは遠いところにあるということを Sylvia は強く意識しているようだ。上の Second Voice のことばで分かるように Sylvia は人間の肉体面を face で，精神面を mouth で表わしている。何よりことばを大切にし，ことばに頼った Sylvia にとり mouth は自己存在を主張する器官であり，存在そのものを表わす。生まれおちた子供が産声の発生と共に呼吸しはじめ，生きはじめることに象徴されるように。[3]

Third Voice の最初のモノローグは過去形に終止するが，今までみてきたように，そもそもの最初からまちがっていた彼女の胎内の子供の上には死の影が，彼女自身には罪の意識がつきまとう。子供が宿ったと知ったときのことは remember できるが，今のことは何ひとつ認識できないのだ。彼女が「今」を語れるようになるには次のモノローグを待たねばならない。過去から脱却できない Third Voice に対し，First Voice は自分の「時」を生きている，というのは前にみたとおりだ。

ここでは天体は彼女を支配するものではない。太陽や星は注意深く彼女を見守り，月は往きつ戻りつ彼女の上をたゆたう。Second Voice が 'I love a dimension.' (l. 30) と，空間，時間の中で生きられないことを嘆くのとは対照的に，First Voice は能動的に自ら時間を超越してゆく。天体，特に月には Sylvia はただならぬ関心を寄せているが，*Three Women* の中でも重要なイメージとなっている。白い月が自分の傍を往ったり来たりするのは，白衣を着た看護婦が行き来する姿からきているのだが，看護婦の顔が月のように白いのっぺらぼうだというのは，Second Voice が囲りの男性が flat にみえたのに通じる。生命を扱う産院での看護婦たちに生命がなく white で flat，おまけにことばもない (ll.96 - 98)。となれば，まるで Second Voice の世界と同じだ。このように月は「死」を象徴するが，それが通りすぎてゆかず往きつ戻りつするのだから，First Voice の育んでいる生命の上にも死の世界が広がっている，ということになる。死の女神である月が生命の誕生を喜ぶはずがない。そこで 'Is she sorry for what will happen?' という悲しい問いかけになる。彼女自身は打ち消すけれども (l.6)。

こうして３人の女性の最初のモノローグを中心にみてくると，それぞれ違った立場ではあるけれど，同じように生命に関わり，生命を身体と心の中にかかえこんでいる女性であることがよくわか

る。3人がそれぞれに互いに対照をなし，また共通の意識を抱く。'I am ready.' 'I am found wanting.' 'I wasn't ready.' と自己認識は違うけれど，生命をかかえこみながら何故か3人とも死をひきずっている。想い描くイメージ，罪の意識，生きている社会への懐疑など，いずれか2人に関わるものはいくつかあるが，3人に共通しているのはこの「死」の影である。

II 出産まで——Fcist Voice の3つのモノローグ

出産を目前にした First Voice の2度目のモノローグは次の1行で始まる。

I am calm. I am calm. It is the calm before something awful: (l. 92)

First Voice は出産を 'something awful' と考え不安である。その不安を反映するかのように，このモノローグの最初の連には死のイメージがずらりと並ぶ。病的な色 yellow が空気を満たし (l. 93)，最初のモノローグで彼女に優しくつき添っていた葉も裏返って白い色 (pallors) をみせる (l.94)。そして病室は white 一色だ (l.95)。時は止まり (l.96)，ことばもなくなる (l. 94, 96) 囲りの医師や看護婦たちの声はもはや「ことば」ではなく，生きた意味をもたない (flatten) (l.97,98)[(4)]。囲りの人々だけでなく，彼女自身も沈黙。

I am dumb and brown. I am a seed about to break.
The brownness is my dead self, and it is sullen: (ll. 99 - 100)

出産は母体の死なのである。第1連をおおっていた死のイメージは彼女自身の死への予感なのであった。そのとき blue の黄昏が広がる。第3連ではいよいよ分娩台に上り，消毒を受け，陣痛がだんだん強まってくる様子がうたわれるが，周期をもって訪れる陣痛は波のようで，彼女は seed より尚一層固く shell のように口を閉ざす。blue の黄昏は今では a big sea となって彼女の囲りに広がる。shell のいる浜辺は白いが，そこにはまちがいなく青い海が広がる。まだみずみずしかった幼い日の Sylvia がすごした Winthrope の海，彼女の想像力の源泉であった海，弟が生まれたと同時にその融和さえなくなってしまった海[(5)]。それ以降，成長と共に離れていってしまった海を，今，新しい生命の誕生と共に First Voice の囲りに蘇らせるのは，2人の子供を出産した Sylvia の実感からくるものであろう。新しい生命との出会いは声との出会い。自分を恐れさせ，心を打ちのめすものではあるが，一担は消え，自己の死に向かわせていった声が，出産と同時に蘇るのだ (l. 112)。'Its (i.e. the first wave tug) cargo of among toward me' (l.110), 'There is no miracle more cruel than this.' (l. 127) 'I am the centre of an atrocity.' (l. 132) 'What pains, what sorrows must I be mothering?' (l. 133) と，First Voice は出産を苦しみととらえているが，それ

は奇跡の苦しみ，まさに「生みの苦しみ」なのである。生まれてくる子供は 'the visitation,' そして 'the manifestations' (ll. 130 - 131). キリストの愛を通しての神の顕現でもあると同時に天罰でもある。人間の生は生まれ落ちたとき以来堕落の一途を辿り，その墜落の人生の結果への自然からの罰として，新しい生命と交換に死ぬ。が，その死はただそういった受身的なものではなく，自ら能動的に愛をもって自己の生命を捨て，新しい生命へと接ぎ木していくものでもある。どんなに生まれてくる生命が自分の生命を扱い，自分を滅そうとも (l. 134)，自分の今迄生きていた世界が全て死滅させられようとも (l. 135)，自分は天となりゴルゴタの丘に象徴される愛でありたいと願う (ll. 139 - 140)。死を前にした First Voice を包んでいた blue の黄昏が，死（夜）を前にした黄昏でありながら，マリアがキリストを包んだように First Voice を包んだことの意味もわかってくる。'O let me be!' (l. 140) の心の叫びを残して古い自己は死ぬ。出産の瞬間は blackness でおおいつくされ，囲りの一切が無に帰す。

A power is growing on me, an old tenacity.
I am breaking apart like the world. There is this blackndss,…
This ram of blackndss.
……
My eyes are squeezed by this blackness.
I see nothing. (ll. 142 - 7)

そうして生まれてきた子供は 'this blue, furious boy' (l.48)。母胎から離れたばかりの子供は海の色だ。まだ完璧な生命と想像力をたたえている。それも産声をあげると同時に red になり，「人間」となる (l.167)。「人間」は完璧な生命が堕落しはじめるところから始まる。ことばを知り，苦しみを帯びはじめたところから始まるのだ。

He is looking so angrily!
He flew into the room, a shriek at his heel.
The blue colour pales. He is human after all.
A red lotus opens in its bowl of blood; (ll. 164 - 167)

子供の産声は「人間」になることへの悲鳴でもあり (l.165)，怒りの声でもあるようだ (l. 164)。生命と同時に「人間」であることの苦しみも子供に譲り渡してしまったあとの First Voice は実に穏やかな口調になる。子供の消浄さ，柔和さを愛をもってみつめている姿がここにはある。

What did my fingers do before they held him?

What did my heart do, with its love?
I have never seen a thing so clear.
His lids are like the lilac flower
And soft as a moth, his breath.
I shall not let go.
There is no guile or warp in him. May he keep so. (ll. 169 - 175)

III 流産——Second Voice の3つのモノローグ

Second Voice の場合は，少量の出血に気づいたときから既に生命は危い。入院しても結局流産してしまうのだが，彼女は死の世界にどっぷりつかってしまって，少しの生命の輝きもみられない。彼女が想い描く我が子は何とも悲しい。

It is a world of snow now. I am not at home.
How white these sheets are. The faces have no features.
They are bald and impossible, like the faces of my children,
Those little sick ones that elude my arms.
Other children do not touch me: they are terrible.
They have too many colours, too much life. They are not quiet,
Quiet, like the little emptinesses I carry. (ll. 64 - 70)

I did not look. But still the face was there,
The face of the unborn one that loved its perfections,
The face of the dead one that could only be perfect
In its easy peace, could only keep holy so.
And then there were other faces. The faces of nations,
Governments, parliaments, societies,
The faceless faces of important men. (ll. 78 - 84)

Second Voice の子供の顔には目鼻がない。勿論口もない。色彩もない。音もない。月と同じなのだ。何も生み出し得ない (impossible)。その子供すらが彼女の腕からするりと逃げていってしまった。他の子供たちに比べると何という違い。生命をいっぱいに孕んだ子供たちには色が溢れ，賑やかだ。しかし生命に満ち満ちた子供は怖い。First Voice においても，後でみる Third Voice においても，同様に子供——生まれたばかりの子供は怖い存在だ。堕落し続ける痩せ細った大人の

生命を脅かすものだ。[6] それほどに完璧な生命なのだ。しかし Second Voice の場合は違う。脅かされるのは我が子によってではない。自分の子供は完璧な生命を望みつつそれを手にし得なかった死せる生命だ。完成させ得なかった生命が完璧であり得るのはこの死の世界の中でしかない。見よ，完璧な生命として生まれ落ち，今や重要人物とされる人間も決して完璧ではない。のっぺらぼうの月の顔なのだ（ll.82－84）。どんな完璧な生命も生きるうちに死の生命となっていく。

自分は胎内に生命を育み得ない。だからといってたとえ育み，産んだとしても，いずれその生命は死の生命と化していく。母である自分は死を生み出すのでしかない。一人の女として一人の子供の生命さえ育み得なかった罪の意識から， Second Voice の意識は， 女であり母であることへの罪の意識へと拡がり，やがては人間の生きるこの地球そのものの孕む罪の意識へと深まってゆく。自己を責め，自己を嫌悪し，自己を恐れながら（l.148,150）。

I am a garden of black and red agonies. I drink them,
Hating myself, hating and fearing. (l. 149－150)

'garden' といえばエデンの園だが，それは死と苦悩の園。アダムとイヴの冒した罪がもたらした生みの苦悩と死――まるで彼女自身がその場である。First Voice は出産する自分に十字架にかかるキリストを想い， Second Voice は自分の中に原罪をみる， というように Sylvia はキリスト教にも深い関心を示しているが，教義をそのもも受け容れているわけではない。キリスト教思想を一つの柱として発展してきた西洋の社会への懐疑を盛りこむことも忘れてはいない。

'Let us make a heaven,' they say.
'Let us flatten and launder the grossness from these souls.' (ll. 90－91)

神と御子（冠詞がついているのは絶対真理の Father, Son ではなく， 今の キリスト 教の 中での Father, Son という意味であろうか。）との会話は上の２行の前に 'Such flatness cannot be holy.' (l. 89) という１行がつけ加えられている。今の人間社会はもうどうしようもなく，聖なるもからほど遠いから，もう一度天国を創りなおそうとするのだが，粗野な部分をとり去ろうとすれば，結局 flat にするしかない。この世は flat でしかあり得ない。死の世界でしかあり得ない。そこから 'And now the world conceives/Its end and run toward it' (ll. 150－151) ということになり，この世界の愛は全てを病ませ，死に追いやる 'a love of death'(l.152) でしかないというところにまでいく。女として母として次々生み出す死の生命をこの世が，地球がどんどんのみほしていく。真赤な口をして生き血を吸っていく地球は吸血鬼（ll. 154－156)。'Old winter-face, old barren one' (l. 158)，の死の形相で，何も産み出さない月と同じに化した地球は， 自らその世界の人間を支え，肥らせながら死に追いやる（l.158)。自らの生命を吸い取っているようなものだ。'old time

bomb' (l. 158) のように今に爆発する。今に全て滅びる。それも男たちが世界を誤って使ってきたから (l. 159)。戦争などという罪を冒してきたから。爆弾などを使ってきたから，今に男たちは食いつくされ (l. 160)，女たちは死を産み出して自らも死ぬ。そういった罪が全て自分の上に凝集されて自分は死ぬ。自分も死んで全てが死ぬ。

The sun is down. I die. I make a death. (l. 161)

Second Voice の心の中で太陽が沈み，地球が自爆したとき，彼女の胎内の子供は完全に彼女のもとを去ってしまう。そのとき月が皓皓と病室を照らす。

There is the moon in the high window. It is over.
How winter fills my soul! And that chalk light
Laying its scales on the windows, the windows of empty
Empty schoolrooms, empty churches. O so much emptiness!
There is this cessation. This terrible cessation of everything.
These bodies mounded around me now, these polar sleepers-
What blue, moony ray ices their creams? (ll. 176 - 182)

心の底の底まで死が満たす。'winter' が，'chalk light' が満たす (l. 177)。全てが止まり，全てが無なのだ。生命の躍動もなければ，死せる生命すらもない。流産してしまった子供たちは北極で凍えて永遠の眠りにつくが，その夢さえ月の冷たい光に凍らされてしまう。生命を紡ぎ得なかったものをまで月はさらに凍りつかせる。死をも，悲しみをも永遠のものにするのだ。2度目のモノローグで自分の子供に対して感じていた 'emptiness' (l.70) が全てに拡がり，'empty', 'emptiness', 'cessation' といった語が連続して口にされる。続く連に次々に使われる 'failure', 'restless', 'useless' などの語と響きあって Second Voice の空虚感と絶望とを浮き彫りにする。死の月の光は彼女の体内にまで入り込む。丸い平べったい月は，彼女の体内で O 形の口を開けて永遠の悲しみを叫ぶ，Munch の『叫び』の絵を思わせる不安の世界だ。そういえば先にみた吸血鬼のイメージも Munch の版画『吸血鬼』を連想させる。[7] 女であることの証しの毎月の出血も今の Second Voice にとっては子供を宿し得なかった無力さの証しでしかない。生命の根源であるはずの海も彼女には空しさの血の海でしかない。死の海，苦悩の海でしかないのだ (ll. 183 - 189)。彼女はなお一層死の中に入りこんでいこうとする。'I shall move north. I shall move into a long blackness.' (l. 190) と。もはや彼女には実体はない。影でしかない。性を具有した人間ではない。男を軽蔑し，責め，女であることを悲しみ，絶望してきた彼女だが，それすらも捨てる。自分は不完全だと囲りから思われている，と認識していた彼女は，自らその不完全さを強く感じる。はっきり 'I feel lack.' (l.193) と。

何が欠けているのかしら，指はちゃんと揃っているかしら，と挙げてみた手の指の間から闇がもれる。光ではなく闇が。生命だけでなく，死も彼女の指の間からもれていってしまうのだ。生命を育めなかっただけでなく，この自分の生命，死の生命すらもとどめておくことができないのだ。しかし，それにしてもこの世は死。死の世界にいるのは自分だけではない。ちぎれたボタンや，穴のあいた靴下，返事を出さないままの手紙，そして，そして…。不完全なものはいっぱいある。自分はその最たるものであるだけだ。(I shall be a heroine of the peripheral! (l. 197) 全てから拒否され，責められるわけではない。'I shall not be accused'をくり返す4度目のモノローグの第4連は，それまでの詩行と雰囲気が違う。どんどん絶望と死の淵にのめりこんでいえうとする彼女の弱さがふっと垣間見られ，むしろ読む者の心を救う。Second Voice はここで自分の弱い心を認め，あがき，生の世界に戻りたがっているように思われるからだ。

IV 再び出産まで——Third Voice の2つのモノローグ

出産を待つ Third Voice のモノローグは，先の2人のモノローグに比べて実に明解である。そしてことば少ない。すっかり自分自身に解ってしまっていて嘆くことすらない。出産ということについては何ひとつわからないまま——ready でないままきてしまったけれど，自分がそういう風に ready でないこと，それほどに非力で，それゆえに罪深いことはいやというほどわかっているのだ。だからこそ沈黙する他ないのだろう。出産の瞬間，ただ1人 Third Voice だけは一言も語らない。3人が交互にモノローグを重ねるこの作品の中で，ただ1度，その均衡が破れるのは Third Voice の出産のとき。この沈黙の語るものは大きい。一番傷ついているのは Third Voice であるのかもしれない。Sylvia があれほど大切にし，よりかかっていた「ことば」だが，その「ことば」にすらよりかかれないほどの痛みがあることを，実は Sylvia 自身知っていたのだ。結局は何にもよりかかれるものなどないことを。

出産直前の Third Voice は，同じときの First Voice に似ているようだが，非常に違う。白い病室に死を感じ，囲りの人間に死の生を感じるのは同じだが，自分の死の感じ方が違う。Third Voice ではもはや不安ではない。はっきりと意識してしまっているのだから。

And what if two lives leaked between my thighs? (l. 120)

囲りの人間は驚き，気が狂うかもしれない。自らの flatness に気づいていない人間がはじめてそれに気づいたときのように (ll. 118 - 119)。でも自分はそんなことはない。自分の flatness もよく知っているように，子供と一緒に自分の生命も流れ出してしまうことをもよく知っているから。'I wasn't ready' であったけれど，今なお 'I am not ready' (l. 125) だということも。病室を照らす灯りは月のように flat で丸い。ただ赤い色をしている。血の色だ (l. 124)。出産は——何かを産

み出すことは——常に流血を伴うが，Third Voice にとっての流血は何も産み出さない。悲しみと悪とを産み出す出産でしかない。'I should have murdered this, that murdered me' (l. 126) などと恐ろしいことまでいう。

生まれてきた子供はやはり怒ったように泣く。が，その泣き声は遠い。

She is crying through the glass that separates us. (l. 205)

She is crying at the dark, or at the stars
That at such a distance from us shine and whirl. (ll. 209 - 210)

彼女の子供は彼女に向かって泣き声をあげてくれない。闇に向かって，死に向かって泣く。あるいは彼女の知る由もない遙か彼方の宇宙に向かっているのかもしれない。泣いていることはわかってもその「ことば」は聞き取れない。自分の手の届かないところにいて，自分にその心が理解してやれないのなら，まるで木の人形と同じではないか (l. 211)。ただ口だけは大きく開くのがみえる。まだ歯の生えていない口はなお一層大きく感じられるが，Second Voice の体内深く入り込んできた，あの絶望の 'O-mouth' と同じ質のものだ。そしてこれはただ子供だけでなく，彼女自身の悲しみ，絶望でもあるのだ。共有し得ないからなお一層の悲しみ，絶望なのである。

V すべてが終って——3人の2つのモノローグ

緊張のときは終った。3人はそれぞれ元の生活に戻ろうとしている。3人の方向性は三人三様だ。First Voice は相変らず安定と不安との間を揺れ動く。生まれた子供はどの子も同じように白い産着を着せられ，腕に名前をまきつけられて，同じベビーベッドに並んで寝かされている。どの子供も 'miraculous ones' (l. 229) であり，'pure, small images' (l. 230) である。おっぱいの匂いがして，まだ一度も土に触れたことのない柔らかい足の裏をしている (ll. 230 - 231)。まだ表情はなく，自己主張もない (ll. 225 - 226)。けれど，皮膚の色は少しずつ違い，髪の毛の濃さも違う。既に個の違いがあるのだ。

They are beginning to remember their differences. (l. 224)

同じく完璧な生命でもその生まれた瞬間から違いが生じはじめ，人間となる。人間の悲しみのはじまりである。眠っている姿は疲れ果て，平べったくすらみえる (l. 219)。死の生命への旅立ちである。子供がちょっと自分の方に顔を向け，ちょっと泣いただけで，おっぱいが張り，胸が暖かくなる。子供の泣き声は直接，彼女の心に響き，彼女の存在の拠ともなる (l. 236)。Third Voice の

場合と大きな違いである。けれど，違いを知りはじめ，淋しさや悲しみを知りつつ成長しはじめた子供の心を，果たして自分が守り，慰めてやれるのかどうか——First Voice は不安にかられる。冷たい月の光にうたれ，どんどん死の生命へと向かってゆく人間の生命をどこまで守れるのか，子守唄には，ことばにはどれだけの力があるのか (ll. 288 - 298)。人間の生命の空しさと悲しさを知りつくしている Sylvia は，自ら求めて子供を産み，心の底から愛しいつくしみ育てながらも，常にこの想いを抱いていたのであろう。子供を産み，母親は死ぬけれど，新しい生命が自分の生命に引き継いで生きていくことは，自分の心がまた新たな顔をつけて世の中に出ていくのと同じようを不安で恐ろしいことなのだということをも想いつつ (l. 301)。ただこの不安をうたった 6 度目のモノローグで注目したいのは自分の子供のことを 'my green property' と呼んでいることだ (l. 295)。子供は自分のひとつの属性のようなものだが，それは green。若々しい生命の色だ。ときに海の blue を漂わせつつも，今まで死の色，white や brown におおわれていた First Voice の声に，やっと生命の輝きがみられる。終始死への不安と生命の歓びとの間を揺れ動きながらも，出産までは死の想いにより強くとらわれ，出産後は生命の歓びにより強く向かっているといえるであろう。

一方 Third Voice はどうだろう。生まれた子供は，自分とはガラスで隔てられた存在でしかなかった。どんなに安らかで眠っていようと，その子供は孤独だ。

She is a small island, asleep and peaceful,
And I am a white ship hooting: Goodbye, goodbye.
The day is blazing. It is very mournful.
The flowers in this room are red and tropical.
They have lived behing glass all their lives, they have been cared for tenderly.
Now they face a winter of white sheets, white faces. (ll. 260 - 265)

子供は島で，彼女は船。どんなに優しく育てられてきたとしても孤独な，真白な死の世界に残されるのだ。赤い苦悩の花が咲く，白い世界に子供を残して去ってゆく白い船の彼女。母親も子供も死の世界から出られない。だから 'It is very mournful.' (l. 262) 入院してきたときはそれでもまだ母親と子供とは一体だった。しかし，今，互いに求めあいつつ，どんなに求められても応えられず，子供が孤独な死の世界にいたることを知りながら去っていく Third Voice は，入院してきたときの彼女ではない (l. 267)。さらに孤独で罪深い。子供をも傷つけ自分も傷つき，ぱっくり口を開けた傷そのもの。

I am a wound walking out of hospital.
I am a wound that they are letting go. (ll. 270 - 271)

何もかもがむなしい。

There is my comb and brush. There is an emptiness. (l. 268)

しかし冬の最中に子供を残して，Third Voice は春の大学に戻る。

I had an old wound once, but it is healing.
I had a dream of an island, red with cries.
It was a dream, and did not mean a thing. (ll. 306 - 308)

が，本当に出産と別離は夢だったのだろうか。傷は癒えて，何もなかったのと同じなのだろうか。だとすれば本当にむなしいが…。大学の制服の黒いガウンを喪服と思う限り，本当に癒えている筈がない (l. 303)。

揺れ動く First Voice に比べ，Third Voice の方はいつも明解だ。どっぷり死の淵につかっているかと思うと，'It was a dream, and did not mean a thing.' と言い切るのだ。読む者には不安を残すが…。

Second Voice も失っていた identity を取り戻したという。

I am not ugly. I am even beautiful.
The mirror gives back a woman without deformity.
The nurses give back my clothes, and an identity. (ll. 239 - 241)

I am myself again. There are no loose ends. (l. 274)

退院を前にして洋服に着がえ，口紅をさすとすっかり元の自分だという。真赤な口紅をさした口はあの吸血鬼の口，死を招く口なのに。口紅を横におき，それと同時に identity も横にとっておいたのはある金曜日のできごとだった。'A day ago, two deys, three days ago, It was a Friday.' (l. 248) それは 'Good Friday' ではなかったか？ 無事出産した女も，流産した女も，大いなる愛に死ぬキリストなのだ。新しい生命のために死ぬ。First Voice は新しい生命をこの世に送り出し，Seocnd Voice は生命となり得なかった子供のために，死を産み出す罪を償い，更に新しい生命のために自分の生命を賭けるために，自らが蘇る。彼女の「人間」としての罪，'wanting' であること，'lack' していることに対しても 'And may I be as prodigal in what lacks me.' (ll. 258 - 259) と明かるいことばだが，自分に欠けているのは，失ったのは，足や，目や，舌であるような肉体の一部分であって，それは車椅子や手話などで充分代わり得る。夫はそのように彼女を理解し，2人はま

た何事もなかったように愛し得る (ll. 250 - 256)——というのだが，果たしてほんとうにそうなのだろうか。不完全な自分，不完全な生命，堕落し，死の生命を生きていることへの罪の意識はどこへいったというのだろう。死の血を流して生命を流出させてしまい，もう胎内に宿すものは何もなくなった今 (l. 275)，ほんとうに 'I am flat and virginal, which means nothing has happened, /Nothing that cannot be erased, ripped up and scrapped, begin again.' (ll. 276 - 277) なのだろうか。窓ガラスに映った姿はきれい (neat) で透明な (transparent) なぐらいなのだが (l. 281)…。

How shyly she superimposes her neat self
On the inferno of African oranges, the heel-hung pigs.
She is deferring to reality.
It is I. It is I—
Tasting the bitterness between my teeth.
The incalculable malice of the everyday. (ll. 282 - 287)

一見きれいに，何事もなかったようにみせても，あの死の世界を忘れているわけではない。自己の死の生命の罪も，現実社会の悪も罪も忘れられるはずがない。口の中に，この世の悪をかみしめながらも，その口はそれを表現できなくなっている。最も饒舌だった Second Voice の口が自己を表現できなくなっているのは，その平穏さが自己に対するひとつのごまかしにすぎないからであろう。

おわりに——最後のモノローグ

入院してきたばかりの3人のモノローグで始まった *Three Women* は，3人が退院してそれぞれの生活に戻ってのモノローグで終わる。

Dawn flowers in the great elm outside the house.
The swifts are back. They are shrieking like paper rockes. (ll. 309 - 310)

I am at home in the lamplight. The evenings are lengthening.
……
There is a kind of smoke in the spring air, (ll. 351 - 354)

Hot noon in the meadows. The buttercups
Swelter and melt,… (ll. 337 - 338)

3人のモノローグの最初のことばである。春の一日，同じ春の一日の朝，夕，昼，に語られるモノローグは3人の意識のありかを暗示する。春は芽生えの季節，誕生の季節，それぞれに新しい生を抱えこんでいながら，First Voice はまさに誕生の時間の夜明けに，Second Voice は死に向から時間の日暮れに Third Voice は生の真最中の時間の真昼に身をおいている。3人の状況からみてしごく自然なことのようだが，逆に真昼に語る Third Voice が一番不安定で，日暮れに語る Second Voice が一番安定している。

Still the river
Remembers how white they were.
……
It finds their shapes in a cloud. (ll. 344 - 347)

Third Voice はいつまでも白鳥の影からのがれることはできないであろう。しかしまたその白鳥の影の啼き声が悲しみに満ちているということはわかっても，何を意味しているのかはわからずじまいに終わってしまう(ll. 348 - 349)。傍を往き交う恋人たちが，black で flat で，実体がなく，死の生命を生きていて，自分とは違った人間だと言ってみても (l. 340)，彼女自身も同じように孤独なのである。ただ 'as grass' (l. 342) と，緑色の生命を自分の中にみてはいるが。Third Voice が長い苦悶の結果辿りついた心況は

What is I miss? (ll. 342 - 350)

と何とも不安だ。結局やはり 'I am not ready' のまま，出発点から何も変わっていないのだ。死の影の中で，死の生命を抱えこんで，その意味すらわからないままにいるのだ。若干の生命の歓びを感じつつ。

文字通り新しい生命の誕生を迎えた First Voice は朝を迎える。つばめが戻ってきてさえずり，牛が啼き，生垣には緑が茂る。色があふれ，音がみなぎる (ll.310 - 314)。生命が息づきはじめるのだ。しかしそこに聞くのは白い水仙の花 (l.315)。生命の開花への一抹の不安の影——死の影がさすのだ。明かるい色彩にあふれた子供部屋の中で，I am reassured. I am reassured.' (l. 316)，'I am simple again. I believe in miracles.' (l.319) と安定した心をうたい，自分の子供が五体満足で良かった，とホッとする (ll. 320 - 322)。奇形などではなく 'But he is pink and perfect.' (l. 327) であるけれど，いつ 'common' でなくなるかもしれないとまた不安にかられる。

I do not will him to be exceptional.
It is the exception that interests the devil.

It is the exception that climbs the sorrowful hill
Or sits in the desert and hurts his mother's heart. (ll. 330 - 333)

このことばの後半の2行にはキリストのイメージが再びでてくるが，良くも悪くも「特別な人」であってほしくない。最後まで不安な First Voice だが，その不安は極めて平凡な母親らしい不安で，'I will him to be common, / To love me as I love him.' (ll. 334 - 335) と典型的な母親のセリフで彼女のモノローグは終わる。

ところで日暮れに語る Second Voice のモノローグは，この作品全体の最後のモノローグでもある。長かった3人の女の苦悩の時も今や暮れようとしている。再び家庭に戻った Second Voice は夫と一日の終わりの静かなひとときをすごす。家の中の灯りは beautifully に囲りを包み (l. 353)，外の靄は 'tenderness'であり，'something healing' だ (ll. 354 - 357)。'I think I have been healing.' (l. 358)，'I recover / From the long fall,' (ll. 365 - 366)，'I find myself again. I am no shadow.' (l. 368) と，安定したことばが並ぶ。そして彼女は 'I am a wife' (l. 369) なのだ。オフィスガールとして不毛な男性社会の中で死の生命を抱えこんでいた彼女は，今，妻として平穏の中にいる。最早実体のない影ではなく，自己の identity をもって。

The little grasses
Crack through stone, and they are green with life. (ll.320 - 321)

固く冷たい石，ひび割れた石の間から生命の息吹きに満ちた若々しい草が芽を出す。不完全な死の生命に新たな生命が芽吹いてくるところでこの話は終わる。'grass', 'green' と続けて2語も生命を表わすことばが使われ，全体の中でも例外的に明かるい詩行で。

Three Women の3人の女は，Sylvia の，そして彼女の考える女そのものの中に共に存在しているものであろう。3人はそれぞれ違うようだが共通点もあり，奇妙にからみあってこの詩は進む。男性を侮蔑し，男性社会に失望しながら，人間であることの罪の意識に苛まれる。女であることを出産に見出し，生命を育み，産むことのむずかしさ，恐しさを思う。それにまつわる女であることの罪深さを思う。しかし自己の生命をかけてでも新しい生命を生み出せるのは女だけである。Syevia は女であることに自分の生命のあり方をみていた。何度も自殺未遂したのも，堕落していった古い自己の死によって産み出される，真の完璧な生命をみたい。完璧な生命を生きたいという彼女のやむにやまれぬ願いゆえであったのだろう。この死の影におおわれた暗い *Three Women* が，最後に意外なまでの明かるさをみせるのは，Sylvia の心が決して死に向かっていたのではなく，むしろ現実の生命の中の死から目をそむけることなく，より完璧な生命へと向かっていたことを示すものと思われる。

〈註〉

(1) 'Poem for a birthday' と名付けられた一連の詩や息子をモデルにした 'Nick and the Candlestick' の中で Sylvia はこのことについてうたっている。

(2) Sylvia は祖母の家ですごした幼い日々が最も自分の生命が「生きていた」時代だと考えているようだ。海は彼女にとって「生命の源泉」であり「堕落する前の自分」であって, blue は海の色として「生命」を表わすものとしてよく使われている。結婚してイギリスに渡ってからも「海」を求めたが, 彼女の「海」はそこにはなかった, とも書いている ('Ocean 1212 - W')

(3) Cf. 'Morning Song'

……
The mid wife slapped your footsoles, and your bald cry
Took its place among the elements.

……

…… And now you try
Your handful of notes;
The clear vowels rise like balloons. (ll. 2 - 3, 16 - 18)

(4) The yellow minute before the wind walks, when the leaves
Turn up their hands, their pallors. It is so quiet here.
The sheets, the faces, are white and stopped, like clocks.
Voices stand back and flatten. Their visible hieroglyphs
Flatten to parchment screens to keep the wind off.
They paint such secrets in Arabic, Chinese (ll. 93 - 98)

(5) Ocean 1212-w'
… As from a star, I saw, coldly and soberly, the *separateness* of everything. I felt the wall of my skin: I am I. That stone is a stone. My beautiful fusion with the things of this world was over.

(6) Cf. 'Morning song'
… New statue.
In a drafty museum, your naked ness
Shadows our safety. (ll. 4 - 5)

(7) Sylvia は絵にも興味をも, 自らもスケッチをいくつか残しているが, 特に Redon や de Chirico を好んだという。Munch への関心についてはよくわからないが, これらの画家は共に生命, 人間存在への強い不安を抱き, 表現していた。特に Sylvia の影, 月のイメージ, red, black, white の3色の世界には de Chirico の影響があるといわれる。(Ct. J. Kroll, *Chapters in a Mythology* pp. 21 - 79 (Chap. III 'The Central Symbol of the Moon'))

参考文献

テキスト

Plath, S., *Winter Trees(Faber Pa-perbacks)*, 1971, Faber and Faber, London.

参考図書

Plath, S., *Collosus(Faber Paperbacks)*, 1960, Faber and Faber, London.

Plath, S., *Crossing the Water(Faber Paperbacks)*, 1971, Faber and Faber, Lodon

Plath, S., *Ariel(Faber Paperbacks)*, 1965, Faber and Faber, Lodon

Kroll, J., *Chapters in a Mythology: The Poetry of Sylvia Plath,* 1976, Harper & Row Publishers, Lodon

Lane, G.(ed.), *Sylvia Plath, New View on the poetry* 1979, The John Hopkins Univ. Pr.,Baltimore

Mazzaro, J., *Postmodern American Poetry,* 1980, Univ. of I llinois Pr. Urbana

Nawman, C. (ed.) *The Art of Sylvia Plath,* 1971, Indiana Univ. Pr. Bloomington

徳永暢三，『ことばの戦ぎ——アメリカ現代詩』1979，中教出版，東京

皆見昭，渥美育子（編），『シルヴィア・プラスの世界』1982，南雲堂，東京

『ユリイカ』（Vol. 12－7）（特集アメリカの詩人たち）1980，青土社，東京

（1985年8月16日受理）